わが国の体操の歴史-特に昭和初期までの器械体操について-(その1)明治時代の体操の展開

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2011-01-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村山, 鉄次郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8890

明治大学教養論集　通巻220号　体育学（1989）pp. 1－16

わが国の体操の歴史—特に昭和初期までの器械体操について—
（その１）明治時代の体操の展開

村　山　鉄次郎

はじめに

この研究の目的は，欧米から輸入された体操が，わが国において複雑な経過を経ながら現在の体操競技や競技的体操が育って来た経過を調べることにある。現在では単に「体操」というだけでは，具体的にどんな体操を指すのか分からない程に多種多様な体操が存在する。しかし，これらを整理し大別すれば，ラジオ体操やテレビ体操などのような美容・健康・体づくり等を目的とした体操（Calisthenics）とスポーツ的に技術を追及し競技を目指す競技体操（器械体操）とに分けられる。ここで論じようとしているのは後者で，特に初期には器械体操の名称が用いられたので，ここでもそれに従った。

１．体操の輸入

わが国において器械体操が行われるようになった時期は，明治初期であることはまず疑う余地のないところである。この辺の事情について，今村嘉雄は『十九世紀に於ける日本体育の研究』という大著の中で詳しく述べているが，要約すれば次の如くである。

文化５年（1808年）にイギリス軍艦フェートン号が長崎港に侵攻した折に，わが国の防衛体制の欠陥が暴露され，特に西洋流砲術採用の必要性が叫ばれる

ようになった。しかし砲術の西洋化は実現までに多くの日時を費やすこととなり，実際には嘉永６年（1853年）のペリーの浦賀来航を待たねばならず，これを機に急速な洋式化が進められることとなった。この洋式化に関しては単に砲術のみならず，兵の調練もまた西洋式を採用することになった。幕府の兵制改革では陸軍が仏式調練（海軍は英式）を採用することとなり，この調練の中の一つとして体術（体操）がわが国に持ち込まれた。慶応３年（1867年）仏国から歩兵少佐シャノアン以下十数名が招かれ横浜表，太田村屯所で歩・騎・砲兵の三兵訓練の伝習がなされた。この後，殊に陸軍に対しては常に仏人教師（マルクリーであれエシュマンであれデュクロであれ）によって，仏式操練の一つとして体操が教えられることになった。①

これらの軍人は，恐らくフランス本国の陸軍の体操や学校体操に大きな影響を与えたアモロス（スペイン人1769～1848）の影響を受けていたであろうし，アモロス自身は本来ペスタロッチの影響を受けたとされてはいるものの，やはり1810年代のドイツ体操やスウェーデン体操の影響を受けている筈である。

さて，明治元年（1868）に出された『佛蘭西陸軍伝習　新兵体術』（田辺良輔雅好著）には徒手体操の他に，跳び台（高さ６尺，７尺，８尺，９尺，１丈という様に段階的につながる台を作り，ここでよじ登りや飛び下り，後方回転下り等を練習する），ブランコ，棒高跳，棒幅跳，木馬（跳び乗り，跳び下り，跳び越し），欄杆（てすり，ランカンと両様に読ませている，のちの手摺にあたる）の運動を掲げている。②

この冊子に見られるように，木馬においては跳び方，跳び台においては後方回転下り・懸垂上がり，欄杆では入り・振り・下り等は，まさに器械体操の基本的な技術というべきもので，この時代には，既にわが国に器械体操が持ち込まれていたといえよう。③

ところで，本格的に器械体操が練習され始めた時期について明確にいうことは困難ではあるが，前述のように1867（慶応３）年には，フランス政府から幕府に派遣された陸軍歩兵少佐シャノアン以下の三兵伝習が横浜表の太田屯所，

次いで江戸陸軍所へ移して行われた④記録があり，田辺良輔もこの折に『新兵体術』の基礎を捉えたものであろうから，これら仏人による示範のなかで所謂「体術」が行われたものであろう。

1869（明治２）年，高知藩で士官に綱引・操練・器械体操・号令の訓練が施された⑤様子が，また翌年には兵隊の訓練として器械体操が行われた模様が谷干城によって記録されている。⑥　また次の明治４年にも，干城は徳島藩の訓練の中の器械体操を見て，「自藩の及ばざる」を嘆いている。⑦

これらを見れば，たとえ素朴な形であるにせよ，既にこの当時わが国で器械体操が始められていたと言って差支えなかろう。

いずれにしても，体操が本格的にわが国に紹介されるのは，仏国陸軍歩兵軍曹デュクロが陸軍戸山学校で体操・フェンシングの指導を開始した1874（明治７）年であり，彼は相当な器械体操の達人であったらしい⑧から，沢山の体操家をここで育成し各地に送り出した⑨ものと考えられる。

このデュクロの他には，これといって体操の達人らしき人は来なかったようだから，わが国のスポーツとしての体操は，まさにデュクロによってもたらされたものといえよう。

1876（明治９）年，陸軍士官学校に体操器械を新設したのを始めとして，陸軍は体操器械を一営内に必ず設置するよう指令を出している。これにより，同年６月には仙台歩兵営所にはじまり，熊本・小倉営所，近衛・東京鎮台工兵隊，広島・山口・丸亀・姫路・大津の各営所に次々と体術器械の設置が見られ，続く1877（同10）年福岡・新発田営所にと体操器械が設けられていったのである⑩。これら，陸軍において教育を受けた満期退役の下士官たちが，学校生徒の体育として兵式体操を教えることになるのである。⑪

注

① 今村嘉雄著『十九世紀に於ける日本体育の研究』昭和42年　P. 503～

② 田辺良輔雅好著『佛蘭西陸軍伝習　新兵体術』明治１年

③ 同上

④ 近代日本総合年表　岩波書店　1978　P. 30　→陸軍歴史　勝海舟

⑤ 谷干城遺稿　島内登志衛編　巻之一　第四編　隈山詒謀録　　P. 192

明治二年九月十三日に土佐に着したり　このとき佛式教師松浦巳三郎以下を同行せり……斯くて歩兵の教師は来りたれ共　練兵場なく　これ迄の如く南河原又は柳原にて事足らず　初めて城内にて先づ士官の者に綱引・操練・器械体操・号令の稽古を受けたり

⑥ 同上　巻之二（下）第二編　東征日録（明治三年二月十七日　34才　於高知）

同十七日陰　練兵見物に行く　大隊礼式より生兵体術　器械体術等見物　總分能く出来たり器械体術尤よし……

これとは別に，同３年には，弘前藩，三根山藩（＝蜂岡藩：越後，巻町・入徳館）でもフランス式兵式体操を実施している（体育史年表／今村嘉雄）

⑦ 同上　明治四年二月十二日　大阪京の花見物として野根山通り発す　同行は小南猿四郎，武田惶策也　甲浦番所を出て阿州に入り海岸通り徳島に行き　該藩の練兵を見物す教師は旧幕人阿久沢某なり　而て兵隊掛りの主たる人は渡辺央なり　練兵は案外能く出来たり　殊に器械体操は我が藩の大に恥じる所あり……

⑧ 日本体育大学80年史　　日本体育大学　第１章　第１節　日高藤吉郎略伝　P. 55 ～

…日高藤吉郎は……，教導団へ入って（1876＝明治９年）軍隊生活を続けた。この教導団時代に　デュクロに体操を習っている。『教導団の教官の中には，常に普佛戦争で得た勲章を胸につけた「ジクロ」というドイツ人がいた。彼の体格は偉大で，その器械体操は絶妙を極め，生徒を高い所（恐らく梁木か12階段であろう）から飛ばしたり，落っことしたため，生徒が彼を殺してしまえと騒いだ程の反感を買っていた』〔筆者注：ドイツ人「ジクロ」はフランス人「デュグロ」に間違いなかろう〕

⑨ 体育原理　高島平三郎　P. 350～351

⑩ 明治陸軍体育史年表／大場一義

⑪ 日本体育大学80年史　P. 68

２．普通体操の普及

1874（明治７）年に来日し，1877（明治10）年４月まで陸軍戸山学校で教えたデュクロのあとに，わが国体操に大きな影響を与えた人物はリーランドであるが，器械体操という面から見れば，彼はスポーツとしての体操の発展には殆

ど寄与しなかったといっても過言ではなかろう。

しかし，リーランドによって理論的背景を得た伝習所の体操は，器械体操とは縁遠い徒手体操（器具体操にしても競技的でなく）中心のものだったが，学校体操としての地位を確立した。1878（明治11）年来日して翌年伝習所で授業を開始して以来，出版される関係図書もリーランド体操系のものが暫く主流を占めていた。[①]この伝習所の体操が普通体操と呼ばれ，陸軍における兵式体操と区別される。

3．兵式体操の採用

文部省が1885（明治18）年，兵式体操の実施を通達するや，兵式体操と銘うった指導書が次々と登場する。[②]しかし，これらはまだまだ器械体操の種目を詳しく取り上げる程ではない。ここで柔軟体操と呼ぶ所謂「徒手体操」は，根本的にはリーランドの「徒手体操」と違うものではないので，相違といえば恐らく隊列運動（教練）にあるといってよいだろう。ただし，兵式体操の採用以来，リーランドの体操伝習所系統ではなく，退役軍人（或いは現役でも）が体操教師として着任することを容易ならしめたに相違ない。結局は，このことが学校生徒に器械体操をひろめる契機となったに違いない。

リーランドの来日後も，その影響を被らずに，ずっと兵式体操を堅持していた学校としては学習院が挙げられる。陸軍士官学校の予備校として創設されたといわれる成城学校[③]も当然兵式体操による体育が行われた。このような学校は，その学校の性格上の必要から兵式体操を採用していたが，成城学校からはやがて多くの器械体操家が生まれた。

4．日本体育会の設立

1891（明治24）年8月11日，現在の日本体育大学の前身たる「日本体育会」が創設され，東京神田錦町に体育場を設置した。ところで，この頃は，表向きには体育の重要性が説かれる反面，実際には体育の軽視がまかり通っていた時

代であったが，陸軍を満期退役した日高藤吉郎は，成城学校の創設に着手し，これが軌道にのると，やがて日本体育会の設立にとりかかったのである。日高の本来の目的は国民皆兵による近代陸軍の完成にあったといわれ，そのあらわれが，将校養成のための予備教育としての成城学校であり，徴兵の対象となる青年の身体ならびに精神を体育的に形成するための「日本体育会」であった。

創立者の日高は，陸軍の教導団時代にフランス軍人のデュクロに体操を習い，兵式体操に詳しかったが，これをそのまま青少年に課すのは行き過ぎと考え，若干の教育的配慮のもとに体操を行わせていたようである。

1893（明治26）年には，体操教員の養成の場として飯田町に体操練習所を設置し，このほか講演会や幻燈会を催すなどして体育の啓蒙を図るとともに，『文武叢誌』（体育雑誌）の刊行も行った。日本体育会の主目的の一つに，練習場の設置があるが，例えば当時の練習場の設備はといえば，鉄棒，棚，木馬，手摺，跳び台（12階段），梁木，回転鐙，遊動円木などであった。これらの設備を使って兵式体操（柔軟体操・器械体操）と銃剣術（銃槍術ともいう）を教えたものである。④

注

① 明治15年，体操伝習所編で『新撰体操書』と『新制体操法』が出され，リーランドの体操を紹介したが，その後同系統の体操書として，『体操便蒙』佐野誠一郎（明16），『体操袖鏡』中山政良（明17），『体操独稽古』（明19），『体操便覧』川瀬修三（明19）などが出されている。

② 『小学兵式体操書』松岡彪（明21），『小学兵式体操法』夏目秋蔵（明21），『兵式体操教練』足立東太郎（明21），『兵式体操指範』牧元精雅（明21）などは隊列運動や徒手体操が主で，器械運動はごく少なくしかも教練的なものに偏っている。

③ 日本体育大学80年史Ｐ.62　日高藤吉郎略伝　明治17年満期退役した日高は　同年11月に文武講習館設立の認可を受け，翌明治18年１月東京築地……に開校し，将校予備の教育に着手した。……明治19年８月に成城学校と改称して急速な発展を遂げた。

④ 同上

5．競技的器械体操の展開

陸軍戸山学校において器械体術（初期には器械体操をこのように呼んだ）が軍事教練として始められたが，この運動を教練としてではなく，スポーツとして熱心に練習し上達した者が決して少なくなかったのではなかろうか？　なお，1876（明治９）年以後日本各地の兵営に体術器械が設置されたことをみても初歩的器械体操が始められたのは思ったより早いと考えるべきだろう。これには，やはりシャノアンらの三兵伝習における体術訓練の影響が意外に大きかったのではないかと考えられる。

体育教師養成のためにリーランドを呼んで体操伝習所を開設してからは，暫くこれといって器械体操の画期的進展が見られることもなかったが，しかし明治10年代から20年代において着々と器械体操がわが国に浸透していったものと思われる。

さて，この当時の器械体操界の第一人者と目される人物は，のちに慶応義塾器械体操部の師範に迎えられる津崎亥九生である。今村嘉雄は，「彼はその名の示す通り1875(明治８)年亥の歳９月，熊本市新屋敷町に生まれた。長じて1890(明治23)年，東京市牛込の私立成城学校幼年科第５級に入学し，これから1895(明治28)年７月まで５年間彼の成城時代が続いた。この５年間に未来の体育家としての素地が作られたのである。最も得意とした器械体操や銃剣術の技量が頂点に達したのもこの時代である①」と述べている。そしてこの時期の戦績を次のように挙げている。

「1891(明治24)年12月15日　日本体育会主催器械体操共進会で，第１等賞状を受けた

1892(明治25)年４月６日　成城学校運動競技会で，器械体操　第１等賞状を受けた

1892(明治25)年11月　第２回の日本体育会大運動競技会で，器械体操第１等賞状

1893(明治26)年10月31日　成城学校運動競技会で，器械体操第1等賞，銃剣術第2等賞

1894(明治27)年11月3日　成城学校運動競技会で，器械体操第1等賞，銃剣術第1等賞

1896(明治29)年5月13日　日本体育会運動競技会で，第1等賞を授賞した[②]」

津崎はこのあと体育者としての修業生活に入るが，その技術水準について今村は次のように非常に高く評価している。

「津崎さんの器械体操の技術は，神技に近く，全く他の追随を許さなかった。それは当時の器械体操選手権競技会ともいうべき成城と体育会の競技会で常に首位を占めていたことでもわかる。明治29年といえば第1回近代オリンピック大会がアゼンスで開かれた年であるが，津崎さんが，もしこの大会に出場していたら，きっと入賞できたであろう[③]」

津崎亥九生に関する記録は実に少ないが，真行寺朗生，吉原藤助による『近代日本体育史』に紹介されているので引用する。

「津崎は……明治28年東京成城中学卒業。翌29年2月日本体育会所属模範体操場の教師となり，次いで日本体育会体操練習所に入学し，同30年同所卒業。翌31年4月文検体操科に合格し，同年9月抜擢せられて東京高等師範学校の授業嘱託。同32年4月同校助教授任命……大正12年3月同校教授……。氏の貢献としては成城中学在学当時より器械体操の練習に腐心し，陸軍戸山学校より特別練習の機会を与えられ，優等賞状を獲得したことがある。日本体育会所属模範体操場の教師時代には，英独語等を半自学自習的に研究し，器械体操の権威を以て知られるようになった。なお，東京高師に職を奉ずる傍ら，明治35年11月より満11年間慶応義塾授業嘱託となり，同44年3月より十数年間東京府青山師範学校嘱託……大正12年9月陸軍戸山学校講師となり……。氏は頑健な体格の持主で元気潑剌として見るからに体育教師としての好典型を備え，時流に頓着することなく一意巧緻練習界のために力を致しておられる。」[④]

注

① 「学校体育に寄与した人々　三」今村嘉雄，学校体育２巻－７号　昭和24年

② 同上

③ 同上

④ 『近代日本体育史』真行寺朗生，吉原藤助　P. 651～2

明治20年代半ばにはこれまでになかった種類の体操書が現れた。渋江保著『簡易体操法』(1892＝明治25年)である。英国の体操書を参考にしたと同時に，球竿体操・亜鈴体操などリーランドの体操を取り入れているところもあるが，器械体操の部では，解説が技術追及的で従来の兵式体操の行き方と異なっている。水平桿体操（鉄棒）の急昇法としてエビ（蹴上がり）や後方浮腰回転などは競技体操の典型的な特徴を持つ技である。①

これと同系の著書としては，ロバート・ストール著『器械体操』(1899＝明治32年)がある。鉄棒の技として，蹴上がり，蝸牛(棒上から→膝懸け後方回転下りとでもいうべきか)，車輪が登場しいよいよ競技体操的になってきている。②

注

① 『簡易体操法』渋江保著

ロンドン，マクラレンの“System of physical education”同 Charls Spencer の“Modern gymnast”メースン“Manual of gymnastic exercises”等に基き，傍ら諸書を参考して編纂したもの　第１章　体操の準備　第２章　徒手体操　第３章　亜鈴体操　第４章　球竿体操　第５章　水平桿体操(横棒＝鉄棒)1.脚懸上　2.脚懸回転(前後)　3.腰掛手離す　4.後方浮腰回転（失敗したら背摺で上れ）　5.渡桿法　6.急昇法（エビ）　7.徐昇法（懸垂・外脚懸）　8.背面水平・正面水平　第６章　平行桿（棒）　第７章　木馬　1.鞍上片脚通し　2.鞍上片手水平　3.長飛法　第８章　鞦韆＝ブランコ(吊鐶も含む)十字懸垂　鞦韆飛び移り等，その他縄・棒登り，梯子（横）移動，棒飛（高・幅）

② 『器械体操』ロバート・ストール著　日本「運動界」編集局補訳（明治32年）

〔鉄棒〕懸垂　腕交差の懸垂　懸垂屈腕　爪先懸け吊下がり　背面懸垂　膝懸け　片膝懸け振り　膝(腿)懸け振り→下り　足懸け上がり　蹴上がり　背摺り上がり　背面バランス棒上立ち　横とびこし(下りる)　背面肘懸け回転　棒上から膝懸け回転下り(蝸牛＝かぎゅう)　車輪（逆手)→廻転と称している　背面水平　正面水平

〔平行棒〕振り　腕支持振り　振り上がり　肩倒立　倒立

〔鞦韆〕逆さでの足吊り　逆さ首支持（足でロープを支える）

〔木馬〕跳び越し（各種）　片腕水平支持

また，同年菱村大助編述になる『新撰器械体操書』[①]が著されたが，これは，2年後に出された大島杢五郎著『新式兵式体操』[②]に酷似している。両者とも兵式体操の形式を採っているからであるが，器械体操の運動内容が豊富になり，競技体操的な技が多く取り入れられているので次にあらましを示すことにする。

注

① 図入　新撰器械体操著　菱村大助　編述　大阪修成堂　明治32年12月5日発行

第1章　第1教（省略）

第2教　尋常体操

鉄棒　第1演習　弾道　2.脚懸上り　3.後下り　4.尻上　5.肘懸上

棚　第1演習　肱上　2.俯下　3.腰懸跳　4.尻上　5.跪坐跳

木馬　第1演習　跳乗　2.跪坐　3.開脚　4.閉脚　5.斜跳（斜めからの背面跳び）

手摺　（＝ほぼ平行棒・段違いにもなる）第1演習　躍進　2.振出（横下り）　3.振動　4.振込（段違で振上1/4 捻入り）　5.転回（両足両腕の間を通して背面懸垂・下りる場合もあり）　6.跳越（鉄棒風横下り）

跳縄　第1演習　棒幅跳　2.棒高跳

跳台　第1演習　単棒跳び（台上から棒をつかんで）　2.複棒跳び

梁木付属

楷梯　第1演習　片昇り　2.柱昇り

鞦韆　第1演習　背面腰懸け　2.後転（うしろかえり）　3.正面腰懸け

吊鍛　第1演習　臂張（片臂屈懸垂で他の臂水平）

第2章　応用演習　第1教　活用器械運動

第1演習　梁木競争　2.縄引き競争　3.障碍物散兵通過　4.障碍物競争通過

第2教　活用野外運動

1.駆歩　2.障碍地通過

第3章　特別演習

鉄棒　1.臂懸開上　2.肘懸上　3.臂立上　4.振上　5.脚懸振上　6.懸垂上　7.海老上

棚　1.片肱上　2.後転下　3.背摺下　4.後跳（倒立から後ろへ）　5.倒立

木馬　1.尻廻（馬尾旋回半分）　2.臀上倒立　3.二節跳

4.一節跳　5.背上倒立　6.側面倒立

手摺　1.転回　2.逆上　3.弾道　4.複木倒立　5.振出倒立

梁木付属

楷梯　1.段昇り　2.反撞昇り

鞦韆　1.縄逓（なわめぐり）　2.転回

吊鐶　1.脱手（内側から片脚抜き）

2.臂立（懸垂上――前転下り）

② 新式兵式体操　大島杢五郎　著　明治34年8月23日

第1部　柔軟体操

第1章　停止演習　　第2章　行動演習　　第3章　携銃演習

第1教　臂の運動　　第1教　駈歩　　第1教　執銃体操

第2教　脚の運動　　第2教　跳越　前へ幅跳，前へ高跳　　第2教　執銃跳越

第3教　臂体脚の運動　　第3教　据銃運動

第2部　器械体操

第1章　普通演習

第1教　基本体操

鉄棒　1.懸垂　2.肘曲懸垂　3.側行　4.脚挙　5.転回

第2教　尋常体操

鉄棒　1.弾道　2.脚懸　3.後下　4.尻上　5.肱懸

棚　1.肱上　2.俯下　3.腰懸跳　4.尻上　5.跪坐跳

木馬　1.跳乗　2.跪坐　3.開脚　4.閉脚　5.斜跳

手摺　1.躍進　2.振出　3.振動　4.振込　5.転回　6.跳越

鞦韆　1.背面腰懸け　2.後転　3.正面腰懸

吊鐶　1.臂張

弾道＝台上から跳び付き一気に振り跳び

吊鐶の臂張＝片腕屈げ片腕水平伸ばして懸垂

跪坐＝座った形

第2章　特別演習

鉄棒　1.臂懸開　2.肱懸　3.臂立　4.振上　5.脚懸振上　6.懸垂上　7.海老上

棚　1.片肱上　2.後転　3.背摺　4.後跳び　5.倒立

木馬　1.尻廻　2.臂上倒立　3.二節跳　4.一節跳　5.背上倒立　6.側面倒立

手摺　1.転回　2.逆上り　3.弾道　4.複木倒立　5.振出倒立

梁木付属

階梯　1.段昇　2.反撞昇

鞦韆　1.繩遶　2.転回

吊鍛　1.脱手　2.臂立

鉄棒・垂球＝片手で鉄棒にぶらさがる，振出＝ふりとび
猿垂(えんすい)＝両脚を両腕の間に通して背面懸垂→片手を放してクルリと体を捻って再び鉄棒を握る
鎌脚＝外脚懸け上がりとでもいうか，脚の外側を棒の前側から懸けて上がる
蝙蝠＝臂立・逆手開脚屈身の時，足の甲側の足首で鉄棒を引っ掛けて前方回転する

第3章　高等演習

1.脚懸け　2.弓張

3.臂立　4.倒立転回

木馬

1.閉脚二節跳び

2.閉脚一節跳び

3.倒立転回　4.一節転回　5.二節転回

手摺　1.閉脚　2.発条　3.側面倒立　4.蝸牛　5.単木倒立　6.転進

遊動円木　1.振動　2.繰歩　3.追歩　4.背面向綱引競争

蝸牛カギュウ＝臂立で両脚を腕の間に通し，腿を鉄棒に懸け後方へ回転し，前方に振れたときに下りる

上の二つの著書における器械体操の技がいかに豊富で競技的であるかは，次に示す1903（明治36）年の陸軍省『体操教範』と比較すれば明白である。

体操教範　陸軍省　明治36年（器械図面付録＝省略）

第1部　徒手体操の部（省略）

第2部　器械体操の部

第1教・鉄棒・横木・棚〔懸垂・肘屈，転回，横行，脚挙，降下〕

・跳越台〔跪坐跳，跳乗，腰懸跳〕・跳下台〔跳下〕・跳縄〔幅跳，高跳〕

・楷梯〔屈伸，登降〕・吊鍛〔振動〕・吊棒（索）〔登降〕・梁木〔速歩通過〕

第2教・鉄棒〔脚懸上，肘懸上，尻上，俯下，後下，振跳〕

・横木〔側面下，振出，蹴上，振込，跳越〕・跳越台〔横跳〕

・棚〔尻上，腰懸跳〕・跳下台〔棒跳下〕・梁木〔駈歩通過〕

第3教・鉄棒〔逆上，背摺，懸垂上，振上〕・跳越台〔縦跳〕・棚〔肘懸上，背摺〕

第3部　応用体操

第1教・跳下台〔跳下〕・跳縄〔幅跳，高跳〕・吊棒（索）〔登降〕

・梁木〔速歩通過，競争通過〕・駆足・早駈競争・人梯

第2教・障碍通過・野外障碍通過・野外駈歩

このように明治30年代は，器械体操（競技的体操）に関して，菱村，大島の著書に見られるように体操技術が発展し，技の種類も豊富になった時期である。丁度この頃，わが国最初の器械体操部が慶応義塾に誕生した(1902＝明治35年)のであるから，これは単なる偶然ではなかろう。体操部創設の主役であり，創立後津崎師範の助教をつとめた篠田信二氏の回想が『慶応義塾器械体操部30年史』に「感慨と感謝」と題して掲載されているが，この当時のわが国体操界の様子をその一端でも知る上で非常に役立つので次に引用する。「由来塾は運動競技に就ては代表者として世界的に有名ではありますが，わが器械体操部が生れる時は非常な難産であったのです。…尤も私は日本体育会で教へられ，又助手もさせられ，或る時は陸軍にまで教へに行ったこともあり，自然各学校にも呼ばれて色々の器械を見ておった…。

又日本体育会では梅津先生，津崎先生が教へられ或は陸軍より教官が来たこともあり，殊に陸海軍共操典にあって器械体操はあらゆる競技の基本体操となって居ったのでありますから，生理，衛生から心理に至るまで研究されて居ったものです。又日本体育会は専ら技術に重きを置かれて…。私も戸山学校に呼ばれたことがありましたが，戸山学校では一つの技術を作り上げ，之を軍隊に教へるには学理と運動が合理的でなければ採用されぬのでありました。其れが為め机上の技術が出来上がっても之を実際にヤッテ見る段になると，もう骨の固い連中で試験することが出来ない為め，吾々が行って，言われたとおりヤッテ見せて試験台になった…」[①]。

これを見ると義塾と，日本体育会，陸軍戸山学校との交流がかなり頻繁にあったことやその他諸学校との交流も盛んであったことが知られる。また，陸軍の戸山学校でさえ，上述のように，外部の若い上級者をモデルに技術の解明をしなければならないように，当時の技術が兵の訓練としては進歩し過ぎたと解すべきか，あるいは戸山学校の体操訓練が技術追及をする余地を与えないと解するべきかのどちらか，いやその両方であっただろう。

1904（明治37）年，慶応義塾において初めて紅白試合が開かれた折，ここに成城中学，早稲田中学，郁文館中学，日本体育会，青山師範などの選手が集まった[2]ということからみても，この頃にはかなりの範囲で器械体操が普及していたものと推察される。

1902（明治35）年に日本体育会が，上野，浅草，芝，坂本，深川の5か所の市内公園に双輪，回転鐙，鞦韆，固定円木，鉄棒などの運動器械を設置した[3]が，これらの公園に若者たちが暇を見つけて集まり，運動をしたもののようである。とりわけ鉄棒は人気があったようで，所謂「公園流」[4]などと呼ばれ，正規に学校などで習ったやり方ではない「自己流」でやっている者が多かったようである。日本体育会によって日比谷公園に運動器械が設置されたのは1903(明治36)年であるが，その翌年の春ここを会場として第3回日本体育会体操学校運動会が催されたが，この時からプログラムの中に器械体操が取り入れられている。[5]

前述の日本体育会初期，牛込時代の運動会では出場希望者は誰でも参加を許されていたが[6]，この頃（牛が淵時代）の運動会での器械体操は生徒による模範演技のようである。

この日本体育会は，最初牛込区薬王寺前に本部を置き，第一体育場を神田錦町3丁目に，第二体育場を本郷区向岡弥生町に設置，体操教師養成の必要から1893（明治26）年には飯田町4丁目（JR飯田橋・貨物駅の一部）に体操練習所を設置している。特別練習生として一定期間（ときには5～6か月）ここで練習した後，一定の試験に合格すれば得業生と呼ばれたが，この得業生の技術的レベルはかなり高いものだったようである。明治26年，陸軍の軍旗祭での模範

演技において彼らの演技が軍関係者並びに参観者の絶賛を浴びた⑦ことからも，並大抵の技では無かったと思われる。

こうしてみると，津崎亥九生の器械体操の腕前は，オリンピック大会で入賞できる程のものだったという今村嘉雄の記述は決して誇張でない⑧と思われる。

また，部創立間もない頃の慶応義塾部員であった瀬川巌氏が米国ウィスコンシン大学へ転校（ママ）した時のこと，推薦されて出場した大学対抗試合で大活躍，該校を優勝させると同時に本人も優勝し，一年分の学費を賄うに足る賞金を得た⑨との記録がある。

これらを見ると，当時のわが国の器械体操のレベルは決して低くはなかったことが知られるのである。

注

① 慶応義塾体育会器械体操部三十年史　P. 10～11

② 同上五十年史　昭和27年　P. 45～

③ 日本体育大学80年史　P. 1147

④ 慶応義塾体育会器械体操部三十年史　P. 104～

⑤ 日本体育大学80年史　P. 387

〔第十一　器械体操　各組選手が鉄棒，棚，遊動円木，横木，木馬，トラッペーの各器械に就き各得意の技を演じたるを以て，其動作の勇壮活発にして身体の機敏敏捷なること軽業師の其れと異ならず。其壮観より筆の尽す所にあらず。拍手喝采の声終始絶えざりき〕

⑥ 同上　P. 119　本会ニ出場シ競技セントスルモノハ何人ニ限ラス之ヲ許ス

器械体操（鉄棒，木馬，棚，手摺，跳縄）

⑦ 同上　P. 117

⑧ 慶応義塾体育会器械体操部三十年史　P. 72 にも次のような記述がある

〔先生は，鉄棒の処へ来て…大振り，巴，宙返り，等をされた。…津崎先生は五十の年でやられた。之には随分驚いた。〕⑨ 同上　P. 14～15

まとめ

わが国の器械体操が，明治時代にかなりの発展を遂げたのには，フランス陸軍から派遣されたシャノアン等(1867)，マルクリー等(1872)，エシュマン(1873)，

デュクロたちのあるいはもっと後のルフェーブル（1887）も含めてフランス式の兵式体操を指導した彼らの努力が大きな位置を占めている。陸軍における指導の形式としてはフランス式というべき兵式体操も，その中に取り入れられている器械体操は，基本的にはヤーンに源流を持つドイツ体操であるといってよかろう。こうして，順調に発展しそうに見えた器械体操も，明治30年代半ばにしてはやくも雲行きがおかしくなる。

この最たる原因は，学校体育および軍隊におけるスウェーデン体操の採用であるといわれる。この時代は，各種の体操が入り組んで指導者の間で混乱を生ずる事態を生むことになるが，このあとの時期が体操史的には最も複雑で難しい部分なので，次号で改めて論じることにする。